校長荒木規夫から保護者・生徒皆様へのメッセージ【不定期コラム№31】R4 7/20

「私の第一声⑲」

【初めて作った定期テスト】

平成６年、初任者の国語教員として貝塚に着任してから２か月後、私は、初めて「中間テスト」を作りました。学生時代、塾の講師をしており、いわゆるテストはたくさん作っていたので、何の心配もしていなかったのですが、現実は甘くはありませんでした。ちなみに、この頃は、手書きのテストが主流でした。私は、大学のゼミで卒業論文用にワープロ（文書作成専用家電）を購入していたので、それで、テストを作ったことを思い出します。

中学校の定期テストには、大きく分けて２つの側面があります。１つめは、生徒が自分の学習の達成度を把握する側面です。得意を伸ばしたり、苦手を克服するためにも、自分の力を客観的に理解し何に取り組めばよいのかを知ることが大切です。この側面には入試の資料としての意味も含まれます。公立高校の入試は、受験当日のテストと中学校での内申点を合わせて合否判定されます。定期テストは、その教科の内申点に反映されます。特に３年生では、自分の進学候補の高校の中から受験校を決定していく場合、合格可能性を考える上で重要な要素で、何を頑張れば、合格可能性が高まるのかも自覚できるのです。

ちなみに、各教科の評定（５段階）は、定期テストだけでは決まりません。評価には観点や要素がいくつもあり、国語科では、音読や話し合い、発表による説明などの力は、筆記テストでは測ることが難しい。そこで授業中に、古文の音読テストをしたり班活動でのディスカッションや生徒本人のプレゼンテーションを採点したりして、国語に定められた観点と内容で、評価をつけています。筆記によるテストは知識・理解などを評価するのに向いています。しかしその力がずば抜けていても（例えば中間・期末両方のテストが 90 点以上でも）、発表などの他の要素が苦手であれば、その教科の総合評価である評定では、５になるとは限らないのです。特に、2016 年度入試から大阪でも、それまでの相対評価による評定が、目標準拠の絶対評価となったことで、観点別評価が重要視されるようになったことの影響も大きいのです。

２つめは、教員が自分の指導の結果を確認する側面です。教員は、学習指導要領に示された学習内容を計画的に指導していきますが、計画通り学力がついているのか確認し、課題のある部分については、指導を修正する必要があります。定期テストで生徒が思ったほど点が取れていない場合、指導方法の改善が必要だということなのです。

もちろん、評価は定期テストだけでなく、授業中など随時行われています。「良くがんばったね」と、教職員が生徒に声をかけるのも評価の１つです。様々な学校の教育活動を経験する中で、生徒は自分の適性や好みを確認し、今後の人生の指針とするキャリア教育の側面もあるのです。自分の好きな教科や得意な分野について、その理由や原因を考えていくことで自分の適性を知り、選ぶべき進路、将来つくべき職業などについて検討する参考にもなるのです。

さて、私の初めて作ったテストは、授業で理解してほしかったことや、覚えてほしかったことをひたすら並べたひどいテストでした。知識を問う問題がほとんどで、国語で付けるべき力や観点も想定せず、難易度も考えていませんでした。生徒には個々の学習の習熟度に大きな差があります。国語の得意な生徒の中にも、苦手な生徒の中にもそれぞれ差があります。それらの生徒がみな、自分の得意と苦手を把握し、次に何を頑張るべきかを感じることのできるテストでなければなりません。今から考えれば、そもそも、１ 学期の指導計画も適当で、教科書を前から順番に授業し、進んだところまででテストを作っていたのです。相棒の先生にずいぶん叱られて、ヒーヒー言いながらギリギリまで作り直していた記憶があります。

現在、三中の先生方は学期ごとに事前に、観点を大切にした評価と指導の計画をたて、テストを先に作り授業をしています。新指導要領となったこの機会に、評価計画も透明化し、教科担任、学級担任、支援学級担任で共有しています。生徒本人とは事前に授業で、保護者とも個人懇談会で共有する体制を作りつつあり、生徒１人１人が何を頑張ればよいのか、明確に具体的に話し合える学校をめざしています。

【不定期コラム№32】へつづく

第三中学校ホームページ では、子どもたちの様子やお知らせなど情報発信しています。ぜひご覧ください。これまでの不定期コラムも「校長室より」のコーナーでご覧いただけます。

http://www.kaizuka.ed.jp/dai3-jh/